

## 所有されない女—ドリンダ・オークリーの自立性

羽澄直子

### Dorinda Oakley : An Independent Woman Who Is Never Owned

Naoko HAZUMI

『不毛の大地 ( *Barren Ground* )』(1925)は、エレン・グラスゴウ ( Ellen Glasgow ) の代表作として高く評価されてきた小説であるが、作者にとってもその序文に “the kind of novel I like to read and had always wished to write” と記するほど、特別な思い出のある自信作である。<sup>1</sup> なぜならグラスゴウにとってこの作品の執筆は、婚約者に裏切られ、深く傷ついた心の傷を癒し、自己を取り戻す契機となったからである。<sup>2</sup> 序文はこう続く。

[ *Barren Ground* ] became for me, while I was working upon it, almost a vehicle of liberation. After years of tragedy and the sense of defeat that tragedy breeds in the mind, I had won my way to the other side of the wilderness, and had discovered, with astonishment, that I was another and a very different person. ( vii )

『不毛の大地』のヒロイン、ドリンダ・オークリー ( Dorinda Oakley ) が、男の愛に裏切られ絶望の淵に落とされたのち、強靱な意志力でもって立ち直り、酪農事業に成功するプロセスには、グラスゴウの味わった絶望と、それを乗り越えようとする不屈の意志が色濃く反映されていると言えよう。自分自身が生まれ変わるためにも、作者の分身とも見えるドリンダは、運命に翻弄されてただ悲しみに耐えるだけの、ヴィクトリア朝の規範を引きずった従来ヒロインとは一線を画し、理性と勇気と独立性を備えた “a new, elemental woman” ( Thiébaux 116 ) である必要があったのだ。<sup>3</sup>

グラスゴウは愛の苦悩からの回復についての心境を、自伝『内なる女性 ( *The Woman Within* )』(1954)で次のようにつづっている。

If falling in love could be bliss, I discovered, presently, that falling out of love could be blissful tranquillity. I had walked from a narrow overheated place out into the bracing autumnal light of the world. Earth wore, yet once again, its true colors. People and objects resumed their natural proportions. (244)

愛に目がくらんでいた時期を通り過ぎた時、ドリンダも前向きに新たな人生を歩むための理性と勇気を取り戻す。同時に彼女は、自分を苦しめた愛というものは以後無縁の生活を送ろうと決心する。しかしその結果彼女はある種の喪失感に悩まされ続けることとなる。なぜなら彼女は女にとって愛こそが人生の最上の喜びだという思いを完全には断ち切れなかったからだ。グラスゴウはそんなドリンダの生き方を “She exists wherever a human being has learned to live without joy, wherever the spirit of fortitude has triumphed over the sense of futility” ( viii ) と解説する。それでもドリンダは、前向きに力強く生きることと恋愛は自分の中では相いれな

いものとし、かたくなに愛を拒絶する生き方を貫いていく。くじけそうになると “I've finished with all that sort of thing” (237)、“I'm through with it” (248)と自分に言い聞かせる。それにしてもなぜドリンドは女の幸せの概念とのジレンマに苦しみながらも、愛に背を向けたのだろうか。

その理由としてまず浮かぶのは、ドリンドの尊厳が踏みにじられる屈辱的な結果に終わったジェイソン・グレイロック (Jason Greylock) との恋が、その後どんな愛にめぐりあっても癒せないほど致命的な傷を彼女に残したことである。婚約者ジェイソンは、昔の恋人ジュニーヴァ・エルグッド (Geneva Ellgood) の父や兄に脅されて、身ごもっていたドリンドを捨ててジュニーヴァと結婚してしまう。しかも彼はドリンドに仕方がなかったと言い訳をし、“You won't give me up, will you?” (169)と、まるで愛人になれとでも言うような懇願をする。ここで彼女を打ちのめしたのは、幸せな新妻から私生児をかかえる不名誉な愛人へと運命が暗転したことよりも、むしろこんなくだらない男に女としての幸せを委ねてしまった自分の未熟さ、愚かさであった。

In that instant, with a piercing flash of insight, she saw him as he was, false, vain, contemptible, a coward in bone and marrow. He had wronged her; he had betrayed her; he had trampled her pride in the dust; and he had done these things not from brutality, but from weakness. If there had been strength in his violence, if there had been one atom of genuine passion in his duplicity, she might have despised him less even while she hated him more. But weak, vain, wholly contemptible as she knew him to be, she had given him power over her. She had placed her life in his hands, and he had ruined it. (168-69)

全身全霊でジェイソンを憎むドリンドは彼を撃とうとするが、憎しみより強い何かは殺人を思い止まらせた。この「何か」とは、彼女の魂を無感覚にしてしまった「空虚さ」である。この空虚さを埋めるものが、愛という人生最上の幸福だと彼女は感じるのだが、ジェイソンのせいでドリンドは愛の記憶から苦悩を引き離すことができなくなっている。あの苦しみを伴わなければ幸福は手に入れない——そう考える彼女には、新しい愛で空虚さを埋めることなど不可能である。望ましい人生を逃すと自覚しながらも、愛のつかの間の甘美さを忘れられなくても、“All the same I wouldn't go through with them again for anything that life could offer” (229)と呟かざるをえないほど、彼女の受けた傷は深かった。だから彼女は愛以外のもので空虚さを埋めてみせようと決意するのだ。

“There must be something in life besides love,” she thought, in revolt from the universal harping upon a single string. Watching the people in the street, she would find herself thinking, “That woman looks as if she lived without love, but she doesn't look unhappy. She must have found something else.” Then, with the vision of Old Farm in her mind, she would reflect exultantly “There is something else for me also. Love isn't everything.” (250)

彼女が見つけた「愛以外のもの」とは、故郷の農園、オールド・ファームであった。

ドリンドが愛を拒んだもう1つの理由は、女の幸福は男との愛情ある生活にあるという社会の通念そのものへの不信感であろう。男との愛を実らせ結婚して子供を育て、家庭を守るといって聞こえはいいが、一方でそれは夫に従属し妻と母という限定された役割のみが期待されるということを意味している。愛の神話の名のもとに、女性の自我はたくみに抑圧されてきたのである。強い自立性と活力を備え持つドリンドでさえ愛への憧憬を断ち切れず、この通念から

完全に自由になれたとは言いがたいが、それでもこのような伝統的な女性の生き方に対する息苦しさを本能的に嗅ぎ取っている。例えば彼女をニューヨークで助けてくれたファラデイ夫人 (Mrs. Faraday) は、高名で裕福な医者の子供にも恵まれ夫婦仲もよいが、似合わない流行の服を着るためにきついコルセットをしめ、苦しそうに息を切らしている様子を見たドリンダは何となくあわれさを感じる。ファラデイ夫人の姿は一見理想的に見える結婚生活にも女性の不自然な譲歩や忍耐が隠されていることを物語っている。ファラデイ医師ほど寛大な人格者を夫にしてもこうなのだ。ましてや臆病で不実なジェイソンに従属せざるをえないとしたら、ドリンダは一体どうなっていたらう。現に彼女からジェイソンを奪ったジュニーヴァは、実りのない結婚生活に自己を失い、精神に異常をきたして行く。宣教師の夢をあきらめ、農場に縛られてあくせくするだけの不毛な母の生き方も、愛や結婚に対する彼女の懐疑心を煽り立てる。社会が女性に求める生き方は、自分の溢れるエネルギーを注ぎ込めるだけの器にはとうていなりえないことをドリンダは感じ取っている。

以上述べたように、ドリンダが男と愛を拒んだ要因は2つ考えられるのだが、その結果彼女は愛に身を委ねて自己を捨てたりせず、自分の活力を自立のために使うという主体的な生き方を求めることとなった。しかしながら19世紀末のアメリカ社会で女性が男性に頼らず自立する手段はごく限られていた。グラスゴウ自身は作家として成功し、経済的な自立を果たした稀な女性であるが、それでも20代で初めての小説を出版する際には、女性がものを書くことへの偏見と戦わなくてはならなかった。<sup>4</sup> そこでグラスゴウはドリンダにはなるべく障害や周囲との軋轢が少ない、農業という自立の手段を用意した。なぜならドリンダを描くにあたってのグラスゴウの主眼は、彼女の自立への道のりというよりも、苦悩を乗り越え男に踏みにじられた尊厳を名実ともに回復させる過程にあったからだ。ドリンダの独立性や活力のすべては恋愛で生じた心の空洞を埋めることに注がれなくてはならず、女性を排除してきたプロフェッショナルな男社会へ切り込むためにエネルギーを消耗するようなゆとりはないのだ。

田畑というのは、家庭や工場とともに女性の居場所とされてきたところである。<sup>5</sup> 農作業に男女問わず家族全員が携わることは、貧しい農家ではごく当たり前のことであった。従って女性のドリンダが農業に従事することをタブー視する空気は、彼女の住むペドラーズ・ミルにはない。さらにグラスゴウは、牛を飼い、酪農場を作ろうと奮闘するドリンダにふりかかるであろう障害をさりげなく取り除き、彼女が弱気になったり努力を怠りさえしなければ事業は成功するような環境を整える。まずジェイソンに裏切られて家を飛び出し、ニューヨークへ行ったドリンダは事故で流産し、未婚の母になることをまぬがれる。オールド・ファームを再生させようと近代的な農業化学を勉強し始めるにあたっては、彼女に好意を寄せる若い医者バーチ (Burch) が手助けをしてくれるし、命の恩人であるファラデイ夫妻は事業に必要な資金を貸してくれる。夫妻はドリンダに恋をしてよい伴侶を持つことを勧めはするが、「女だてらに」科学の勉強をして、頭脳を使う合理的な農業を目指す彼女の夢を非難せず応援してくれる。ペドラーズ・ミルで既に酪農で成功したエルグッド家の息子ボブ (Bob) は、酪農に必要な雌牛を買いにきたドリンダを励まし、様々なアドバイスをする。そして病弱な自分の妻を思い浮かべながら、「I like women who take hold of things and aren't afraid of work when they have to do it」(292) とドリンダの活力と積極性を賛美する。ドリンダの亡くなった親友の夫ネイサン・ペドラー (Nathan Pedlar) は、常に彼女のよき理解者で、援助を惜しまない。目標に向かって突っ走る彼女に時々弱々しく反対するのは母だけである。

貧しいとはいえオールド・ファームという広大な農園を持つ一家の娘としてドリンダは周囲

から一目置かれている。オークリー家の男性——父、兄、弟——は才覚に欠け、前近代的な農業から脱却できず、荒れた土地を豊かにすることなど望むべくもない。それでも彼女は報われることがなくとも不平を言わず忍耐強く働く父を尊敬していたが、兄弟に対しては余りの無能さに呆れ、一緒に仕事をする気にもなれなかった。兄は結婚で別家を構え、父が亡くなり、事件を起こした弟が家を出ていくと、母とともにオールド・ファームに残るドリンドには、女性に要求される家事の切り盛りではなく、男性に割り振られる家長の役目が期待される。父の葬儀のあと彼女が “We don't need a man... If I couldn't do better than the men about here, I'd be a mighty poor farmer” (302) とたんかを切っても無能な兄弟は有能な妹(姉)に何も文句は言わない。それに元来オールド・ファームは母方のアバーネシー (Abernethy) 家のものであった。農場の所有者は母であり、その母の権限を確実に保証するために、父は遺言で農場の器具と馬を母に残していた。リンダ・ワゴナーが指摘するように、オールド・ファーム再建は、“matriarchal line” の責任なのである (74)。自分の家の荒廃した土地を整備し、自分の農地を酪農場にすることに熱意を注ぐドリンドの行為は、他人から称賛されこそすれ、非難されることはない。母は農場を娘に残したので、母が亡くなると彼女は名実ともにオールド・ファームの所有者として、思う存分経営の采配をふるうのである。

ドリンドは毎朝自分で乳を搾り、衛生管理に細心の注意を払って最高級のバター作りにいそしんだ。ニューヨークで学んだ最新の知識を駆使して、長年の酷使で痩せたしまった土地の手入れにも取り組んだ。弟は農業のことを “the meanest work ever made” (258) と嫌う。確かにペドラーズ・ミルの農民たちにとって土地との戦いは食うか食われるかの過酷なものであった。しかし彼女はマシューじいさん (Old Matthew) の “Put yo' heart in the land. The land is the only thing that will stay by you” (332) という言葉に真実味を覚える。こちらが頭を使い心血を注ぎ込めば、それに見合ったものを大地はいつか返してくれるはずだ。大地とともに育った彼女は大地を信頼している。それに何といっても “The farm isn't human and it won't make you suffer. Only human things break your heart” (306) ということを彼女は身にしみ感じていた。野良仕事には近所の黒人男性たちの手を借りたが、彼女の孤軍奮闘ぶりからは、夫に仕えて家庭を守るといった伝統的な女の生き方に束縛されないはつらつとした姿がうかがえる。働き始めこそ “Because I am a woman the hands will expect me to shirk, and I must show them that I know what I am about” (283-84) という気負いが見られるが、“I won't let [marriage] interfere with my work. No man is going to do that” (381) と言ってのける彼女は、理性や知識が生かせる農業で女性であることがハンディになるとは考えていない。現に農場は、彼女と母、そしてたいていの男よりはるかに役に立つ有能な黒人女性フラヴァンナ (Fluvanna) がいれば何とかやっていけるのである。一般に女性が男性に伍して何かをしようとすると、ともすると肩肘張って男性的になりがちである。母に恥ずかしいと言われてもオーバーオールを着て乳搾りをし、“I am hard. I'm through with soft things” (309) と言う家長ドリンドにもその傾向が見られるが、彼女の場合は父や兄弟をはじめ周囲の男たちが幸運にも “masculine power” をあまりかざしたりしないので、ことさら男性的になって男に対抗しなくとも、仕事上の障害を切り抜けることができる。そのためか彼女は「女らしくない」といったたぐいの世間からの性差別的な中傷をまぬがれている。確かに野外での労働で肌は荒れ、体つきもたくましくなり、時には家族や使用人に対して威圧的な態度をとることもあるが、そんな彼女にいわゆる「女らしい」という観点とは違う、別の「女の魅力」を感じる男性もいる。生活が落ちつき久しぶりに新調した服を着た彼女は女王のような威厳と美しさがあると褒めそやされる。彼女は自分の人生から男

を切り捨てたが、男の方は相変わらず彼女のセクシャリティを無視できずにいる。

そんなドリンドが自分でも思いがけずネイサンと結婚したのは、彼の農業の知識が有用であることと、独りで老いていくことにふと寂しさを覚えたからで、彼に対する恋愛感情、性的関心は全くなかった。控えめなネイサンは “You'd be just as free as you are now” (373), “I'll never interfere with you” (374) と言い、彼女に妻の役割を押しつけることはなかった。オールド・ファームという自分の財産がある彼女は夫に依存する必要もなく、“One man had ruined her life; but no other man should interfere with it” (382) という固い意志が乱されることもなかった。自分に対する寛容さに感謝しつつも “scarcely more than a superior hired man on the farm” (387) としか考えられないネイサンとの結婚は、ドリンドにとって便利このうえないものだった。結婚するのは当たり前という世間の風潮に逆らうエネルギーはとりあえず必要なくなったし、ネイサンの子供たちを含めた「家族」もできた。とくに足の不自由な末の息子ジョン・アブナー (John Abner) は彼女のお気に入り、良き相談相手となる。しかし何といても結婚の一番の収穫は、借金が払えず競売にかけられたジェイソンの家の地所、ファイヴ・オークスをネイサンに競り落とさせたことだろう。ファイヴ・オークスを手に入れることこそ、酪農を始めた当初からのドリンドの夢だった。しかし女性である彼女が由緒ある農地を直接競り落とせば何かと風当たりは強くなるだろうし、彼女とジェイソンの昔のいきさつは村中に知られている。そこでファイヴ・オークスを担保に取っているネイサンの出番となるのである。超安値で競り落とした直後に売買契約をかわすネイサンとジェイソンを見比べた彼女は、“[Nathan] is worth twenty of Jason” (401) と思い、いつになく夫に親近感を覚える。そのネイサンも数年後、列車事故で他の乗客を助けて英雄的な死を遂げる。まるでファイヴ・オークスを手に入れたことで彼女の夫としての存在意義は果たしたと悟ったネイサンが、最後に「英雄の未亡人」という名誉ある称号を妻に与えて消えていったかのようだった。人々は彼の死を悼み、英雄の未亡人を慰め励ますが、ドリンドにしてみれば “Although Dorinda would have been astonished had she discovered it, the years after Nathan's death were the richest and happiest of her life” (460) というのが真実であった。

このようにドリンドは、自立を果たす条件には恵まれてきたのである。ジェイソンとの悪夢のような恋愛から “so long as she could rule her own mind she was not afraid of the forces without” (257) ということを学んだ彼女がこだわったのは、自分が自分であることだけは譲らないこと、いかなる者にも自分を侵させないことであった。あとは意志を固くして忍耐強く仕事に打ち込みさえすれば、環境が彼女を自立と成功に導いてくれた。とにかく彼女は自分の人生を他人、特に恋愛、結婚の名のもとに男に翻弄されることだけは我慢できなかったのである。男に人生を翻弄されるということは、男を人生に立ち入らせるということ、ひいては人生を男に所有されてしまうことだと彼女は痛感したのだった。自分が自分の人生を支配したいというこだわりは、所有されるかわりに自分が何かを所有したいという切望となって表れる。彼女の人生において、「所有すること」は男からの自由、独立を意味するようになる。例えばニューヨークでの失意の彼女がドレスメーカーの店でのお針子の仕事を紹介された時、まず頭に浮かんだのは、“There was a fortune, she had heard, in dressmaking in New York. Miss Seena knew of a dressmaker who kept her own carriage” (213) ということであった。ドレスメーカーは女性が腕を発揮して成功できる数少ない仕事の一つであり、その成功のステータスがドリンドにとっては「自家用四輪馬車を所有できる」ことだった。残念ながらドレスメーカーのところへ行く途中彼女は交通事故にあい、この仕事とは縁がなかった。そのかわり子供を流産し、

親切なファラデイ夫妻に助けられるという幸運にめぐり会うのだが。パーチ医師に手を握られた時、彼女の体の全神経が拒絶反応を示したのは、男性にさわられたくないというだけではなく、「手を握られる」＝「相手の手中におさまる」＝「所有される」という連想が浮かんだせいであろう。これは男に近づかれ、いつのまにか彼のものになってしまうことへの恐れと嫌悪感の表れである。雌牛を購入しにエルグッド家を訪れた時には、彼らの地所、グリーン・エーカーズの繁栄ぶりを目にして、“I couldn't have anything like this in a hundred years” (289)と落ち込んでしまう。彼女は既に土地は所有していた(厳密には母のものだったが)ものの、豊かに栄えた農場はまだ所有していなかったし、所有できる自信もなかったのである。しかしボブ・エルグッドが用意してくれた雌牛の美しさを見て、こんな素晴らしいものを所有できる喜びに胸をときめかせる。またブルーリボンを受賞したボブ自慢の雄牛の、“[the bull] looks as if he owned everything and yet despised it” (293)といった様子に感銘を受ける。値は高かったがこの7頭の雌牛の購入こそ、彼女の酪農事業の始めの一步であり、後の農場の繁栄を導くものとなった。しかしドリンドラの最大の、そして最終的な野心は、ファイヴ・オークスを所有することであった。まだオールド・ファームの再建も始めないうちから、彼女は“*Yes, it's absurd; but all the same I'd give ten years of my life to own Five Oaks*” (277)と宣言したのである。これはエルグッド家への対抗心(オールド・ファームとファイヴ・オークスを合わせるとグリーン・エーカーズより広くなる)と、ジェイソンへの一種の復讐心から生じた所有欲であろう。かつて自分を愛人として所有しようとしたジェイソンの所有地を奪うことで、自分は決してジェイソンに所有されないことを証明したかっただと言えよう。結局10年以上かかったが、ねばり強く待ってファイヴ・オークスを自分のものにした彼女は、この荒れた地所を甦らせるために全精力を注ぎ込む。ネイサンが亡くなると、同じように妻を亡くしたボブ・エルグッドが彼女に求愛をし始める。しかし今回は彼女は承諾するつもりはない。今の彼女は実り豊かなオールド・ファームとファイヴ・オークスを所有する大地主だし、信頼できる義理の息子ジョン・アブナーもいる。若いころは金髪ハンサムで彼女もちょっぴり憧れたボブは、今やぶくぶく肥えたみっともない中年になっている。彼女は“*Perhaps women are more fastidious than they used to be, but men have not yet found it out. Or is it simply because I am independent and don't have to marry for support that I can pick and refuse?*” (473)と自問する。ネイサンは醜男だったし煙草を吸いながら彼女を迎えるような不作法な男だったが、それでも彼女が求婚を受け入れたのは、彼が彼女の人格を尊重し、彼女を夫の所有物とは決して考えないと確信していたからだ。一方ボブは煙草の火を消して彼女を迎える礼儀をわきまえているが、これは女性は半人前だから保護しなくてはならないという意識の表れに他ならない。このような男はえてして妻を自分の支配下に置きあれこれ指図したがらる。男に養われる必要はなく、所有されることを何よりも嫌う自立した女性ドリンドラには、受け入れ不可能な結婚である。

若い頃の挫折を乗り越え、見事に人生を建て直したドリンドラとは対照的に、彼女を苦しめた元凶ジェイソンは、村人から彼女を捨てたことを非難され、ジュニーヴァとの不毛な結婚生活の中(彼女は狂乱の果てに入水自殺する)で飲酒に浸り、ついには借金でファイヴ・オークスを失うことになる。彼の落ちぶれた姿は彼女に自分の勝利と同時に、こんな男に人生を滅ぼされかけたという屈辱を改めて感じさせる。そのジェイソンのアルコール中毒が進み、いよいよ救貧院に送られることになった時、ドリンドラはある決意をする。

Her exultation over Jason's ruinous end had diminished now into an impersonal pity. She had longed to punish him for his treachery; she had hated him for years, until she had dis-

covered that hatred is energy wasted; but in all her past dreams of retribution, she had never once thought of the poorhouse. Even as a question of justice, it seemed to her that the poorhouse was excessive.... Yes, whatever he deserved, the poorhouse was too much. Though the horror of his fate did not lessen the wrong he had done, by some curious alchemy of imagination it reduced the sum of human passions to insignificance. What did anything invisible matter at the gate of the poorhouse? (483-84)

ジェイソンを軽蔑しながらも救貧院送りだけは道義的に耐えられないドリンダは彼を引き取り世話をする。数カ月後彼女の外出中に彼は息をひきとる。彼の死は嬉しくも残念でもなかったが、葬儀を終えると彼女は言いようのない虚無感と脱力感に襲われる。若き日々の傷の痛みとともに彼に恋をし始めた頃の情熱的で甘美な思い出が甦る。“Love was the only thing that made life desirable and love was irrevocably lost to her” (524) という思いが彼女を苦しめる。しかし夜明けの大地のにおいが、失ったもの、所有できなかったものを悔やむかわりに、自力で手で入れたもの、常に自分とともにあるものの価値を彼女に思い出させる：“While the soil endured, while the seasons bloomed and dropped, while the ancient, beneficent ritual of sowing and reaping moved in the fields, she knew that she could never despair of contentment” (525)。彼女の活力と勇気が回復する。ボブとの再婚をそれとなく勧めるジョン・アブナーに“I am thankful to have finished with all that”(526)と答えるドリンダのセリフで『不毛の大地』は締めくくられる。愛に惑わされることなく、誰の妨げも受けずに独立独歩の人生を歩んでいける50歳の彼女は、“The best of life...was ahead of her”(525)という確信とともに未来を見つめるのである。

### Notes

- 1 Ellen Glasgow, *Barren Ground* (1925; New York: Harcourt, 1985) vii. 以後このテキストからの引用は、文中のかっこ内にページ番号を示す。
- 2 ヘンリー・アンダーソン大佐との恋愛と破局についてはグラスゴウの死後出版された自伝『内なる女性(*The Woman Within*)』第5章に詳しく書かれている(自伝では本名ではなくハロルド・Sと記されている)。1916年に会った2人はすぐに婚約するが、赤十字の活動のためヨーロッパへ渡った大佐はルーマニアの女王と恋に落ち、婚約は破棄される。しかしグラスゴウと大佐のつきあいはその後21年間続く。
- 3 失意の中でもドリンダはこう考える：“What surprised her, when she was not too tired to think of it, was that the ever-present sense of sin, which made the female mind in mid-Victorian literature resemble a page of the more depressing theology, was entirely absent from her reflections”(202)。
- 4 処女作 *The Descendant* (1897) 出版までのいきさつは自伝の第2章で紹介されている。
- 5 FrazeeによるL. R. Edwards, M. Heath, and L. Baskin, eds., *Woman: An Issue* (Boston: Little, 1972, 17)からの引用 “...for most of this country's history, women's place has been in the home, in the fields, in the factories, in the sweatshops, or any place except where power is”を参照(“Ellen Glasgow as Feminist” 178)。

### Works Consulted

- Frazee, Monique Parent. “Ellen Glasgow as Feminist.” *Ellen Glasgow: Centennial Essays*. Ed. M. Thomas Inge. Charlottesville: UP of Virginia, 1976. 167-87.
- Glasgow, Ellen. *Barren Ground*. 1925. New York: Harcourt, 1985. 板橋好枝、羽澄直子、藤野早苗訳『不毛の大地』荒地出版社、1995。

- . *The Woman Within*. 1954. Charlottesville UP of Virginia, 1994.
- McDowell, Frederic P. W. *Ellen Glasgow and the Ironic Art of Fiction*. Madison U of Wisconsin P, 1960.
- Thiébaux, Marcelle. *Ellen Glasgow*. New York Frederic Ungar, 1982.
- Wagner, Linda W. *Ellen Glasgow Beyond Convention*. Austin U of Texas P, 1982.
- 有賀貞、大下尚一編『概説アメリカ史』有斐閣、1981。
- 高田賢一、野田研一、笹田直人編著『楽しく読めるアメリカ文学《作品ガイド150》』ミネルヴァ書房、1994。
- 福田陸太郎編著『アメリカ女流作家群像』駸々堂、1980。
- 本間長世、有賀貞編『アメリカ研究入門 第2版』東京大学出版会、1980。